

『素粒子論研究』と益川先生の思い出

福間 将文（京大理）

基研の助手だったときに『素粒子論研究』の編集長を仰せつかり、理学部に異動するまで続けていました。著者との連絡や校正などは、当時基研にあった理論物理学刊行会の野坂さんがすべてやって下さっていたので、私の仕事は単に投稿された論文に掲載許可を与えるだけでした。

ところが、本来単純で楽なはずのこの作業が、実は大変であることをすぐに思い知ります。素粒子論グループの機関紙である『素粒子論研究』は、当時、誰もが審査なしに自由に投稿できるとされていて、素粒子論研究者以外の方たちからも投稿がありました。しかしながら、その中には独創的すぎて掲載すべきでない論文もありました。もちろん、第二、第三のガロアが投稿しているかもしれませんので出来るだけ慎重に判断しましたが、それでも、全国の研究者・研究機関からなる購読者の皆様に配布する雑誌としては、掲載をお断りせざるを得ないことが何度もありました。そうしたとき、投稿者が刊行会にお怒りの電話をかけてくるものが一定の割合で存在し、その都度私に対応していました。「掲載拒否は『素粒子論研究』の投稿規程に反するのではないか」というのがお怒りの理由ですが、こうしたクレームに毎回対応するのはかなりしんどい作業でした。

何度か本当にひどいことがあったため、いよいよ当時の所長であった益川先生に相談し、投稿規程を変更して、今後は「素粒子論グループのメンバーに限って投稿できる。ただし、メンバー以外でも編集部が特に認めた場合には掲載する場合がある」といったルールに変更してよいか伺いました。益川先生はその場ですぐに了解され、責任は自分がとるので自由にやってほしい、何か問題が起きたら自分のところに回すように、ということまで仰ってくださいました。その後、益川先生からの言葉通りのご支持とご協力のおかげで無事に投稿規程を変更でき、私のところにもクレームは一切届かなくなりました。

「責任は自分がとるので自由にやってほしい」というのは実に響きの良い言葉ですが、本当に最後まで責任を取るのとはなかなかできないことです。益川先生は学問だけでなく人間的にも尊敬されて多くの人に慕われていますが、今回のことはその理由がよくわかる出来事でした。私の人生の大切な思い出の一つになっています。